

## 石川

2017年3月17日

### ガザの企業家 奥能登に 女性2人 和紙作りの技に感心

紛争が長期化しているパレスチナ・ガザ地区で企業家として活躍する女性二人が十六日、輪島市を訪れ、和紙作りを見学した。十八日まで奥能登の企業や伝統工芸などを視察し、今後の事業展開に反映させる。(山本義久)

ガザでビジネスに取り組む若者を支援する「Japan Gaza Innovation Challenge」(東京都、略称ガザビジ)が昨年八月、現地でビジネスコンテストを開催。優勝したマジド・マシュハラウさん(23)、準優勝のアマル・アブ・モエリックさん(25)を招待した。

マシュハラウさんは、発電用に燃やした後に出る灰を再利用した建設用ブロックを開発。モエリックさんは、昇降用の荷台を製造した。



和紙作りを見学するアマル・アブ・モエリックさん(右から2人目)とマジド・マシュハラウさん(同3人目)＝輪島市三井町で

二人は八～十九日、国内に滞在。奥能登の視察はガザビジと交流があり、輪島を中心に能登地区の活性化に取り組む認定NPO法人「紡ぎ組」(東京都)が同行した。

この日は輪島市三井町で仁行和紙を作っている遠見和之さん(44)の作業所を見学。モエリックさんは「職人の仕事は正確で、美しい形にできあがっている」、マシュハラウさんは「花や木など自然を美しく表現している」と感心していた。

二人は十七、十八両日、珠洲市で揚げ浜式塩田の製造工程や珪藻土(けいそうど)の採取場を見学するほか、同市民と交流したり、輪島市内の塗師屋を訪れたりする。

紡ぎ組の佐藤克己理事長(50)は「ガザでは紛争が何度も起き、職に就けず貧困に苦しむ人が多い。若者の希望の芽を育てたい」と強調し「奥能登で役立つことがあると思う。伝統的技術を伝えることで帰国後、新たな事業が生み出されることを期待している」と話した。

Copyright © The Chunichi Shimbun, All Rights Reserved.